

最蓮房あて御書の問題点

—立正観抄と四重興廃・真如隨縁論—

中 條 暁 秀

(一) はじめに

故立正大学教授浅井要麟先生の祖書学の特色は遺文の真偽論にあるが、その一つに「祖書の思想的研究」(『日蓮聖人教学の研究』¹⁾所収)がある。それは、中古天台は円密禪合談の雜乱教学で、台密教義を権実雜乱として極力付けられた宗祖が、このような思想を取り入れられるはずはなく、宗祖の思想の本質は、中古天台の思想と異質でなければならぬという前提にたつて、中古天台教学に与同的な遺文は凡て偽撰として排除しようとする試みである。この試論は、夾雜物を除去して純粹日蓮義を樹立しようとする貴い作業であつたと思うが、思想内容に検討を加えることによつて、真偽を判定しようとする方法は、余りにも冒險すぎるのではないかと案じられる。²⁾『立正観抄』を一つの例としていえば、浅井要麟先生は、止観勝法華の説は、宗祖より三十一才後輩の仙波の尊海がたてたものであるから、宗祖の時代にはなかつた思想であるとして、これを以て『立正観抄』偽書説の有力な根拠とされている。これらの点を踏まえつつ拙稿は、最蓮房あての御書十二篇中、身延山久遠寺に蔵され、身延三世日進の写本が現存する『立正観抄』について、殊にその中に説示される四重興廃(止観勝法華劣)と真如隨縁論とに焦点を絞つて、吟味しようとするのである。

最蓮房あて御書の問題点(中條)

最蓮房あて御書の問題点(中條)

なお既に、

(a)最蓮房の伝について。

(b)最蓮房あて御書十二篇の選定について。

(c)身延日進と中山日祐との極めて親密な関係を考える時、日祐の目録・記録・著述類中に『立正観抄』のことが片鱗だにないということは理解に苦しむということについて。

(d)宗祖の教学の一つの特色に、充分に吟味された文献を利用して、自説の援証とする文証主義があるとの点から、『立正観抄』の引用経論釈の大典等について検討を加えると、曖昧さの残る六・七箇所が指摘されるなどの点について。

の考察を本誌五三号⁽³⁾において試みてあるので参照されたい。

(二) 最蓮房あて御書と中古天台文献

——中古天台文献について——

現存する中古天台文献の相当数は、最澄・源信撰とされ、その他の場合においてもほとんどが、過去の優れた学匠の名に仮託されている。したがって、その文献の成立年代考証は、至難の業である。いうまでもなくこれら中古天台文献は、平安末までは口伝乃至切紙を以て伝承されていたが、徐徐に成文化が平安末から鎌倉にかけて試みられ、文献の大部分は鎌倉中期以後の成立と見られる。⁽⁴⁾そして、確実に宗祖以前に成立していたものは、『顕密一如本仏義』・『本理大綱集』・『授決円多羅義集唐決』程度にすぎないと、浅井円道先生は指摘されている。⁽⁵⁾しかし、成文化に

至るまでは、かなりの時間を要したものであろうから、成文化以前の思想内容としては、日蓮以前に存在していたものが、相当数あったと見て差し支えなからう。

——最蓮房あて御書と中古天台文献——

最蓮房あて御書と中古天台文献との係わりについて、その幾つかを見てみると、

(1) 最蓮房が宗祖から賜わった遺文には、例えば『生死一大事血脈抄』の血脈、『草木成仏口決』の口決、『当体蓮華抄』の当体蓮華、『十八円満抄』の十八円満など、その題名を見ただけでも中古天台色が濃厚であることを知るのである。そして、自説の援証として引用される文献を見ても、『立正観抄』についていえば、『慈覚大師積』⁽⁶⁾・『灌頂文旨血脈』⁽⁷⁾・『天台大師自筆血脈』⁽⁸⁾・『伝教大師血脈』⁽⁹⁾など切紙相承的な口伝法門が、引用されていることを知るのである。

(2) 最蓮房が入信後最初に賜わった遺文が、文永九年二月十一日付の『生死一大事血脈抄』である。その冒頭近くに、
伝教大師云、生死二法一心妙用 有無二道本覚真徳文⁽¹⁰⁾

という中古天台文献からの引用がある。これは伝最澄の『天台法華宗牛頭法門要纂』の第五の「三惑頓断」の冒頭の一節、同じく伝最澄の『五部血脈』の「生死覚用鈔」(「本無生死論」)の長行に相当する⁽¹¹⁾。

なお田村芳朗先生の「天台本覚思想の文献と特色」(『天台本覚論』所収)中の文献成立年代区分によると、『牛頭決』及び『五部血脈』は「第二次形態(平安末期・一一五〇〜鎌倉初期・一二〇〇)」で、宗祖以前の成立におかれているのである⁽¹²⁾。

因に、『生死一大事血脈抄』は録外御書巻十三に収録され、真蹟はない。また、真偽を疑う人もあるから、これを

最蓮房あて御書の問題点(中條)

最蓮房あて御書の問題点(中條)

以て『牛頭決』・『五部血脈』の成立が、宗祖以前のものである証拠とする訳にはいかない。

(3)日蓮教学では総じて『修禪寺決』からの引用は、日蓮遺文にはないと踏んでいる。⁽¹⁵⁾つまり『修禪寺決』は宗祖以降の成立との理解である。前掲の田村先生の成立年代区分が、本書を「第四次形態(鎌倉中期・一二五〇)鎌倉末期・一三〇〇)」とされているのも首肯できる。そして、最蓮房あて御書十二篇中、『修禪寺決』と係わりのあるものは、『当体蓮華抄』と『十八円満抄』の二書である。すなわち、『当体蓮華抄』は、

伝教大師修禪寺相伝日記とて四帖あるなり。⁽¹⁷⁾

と記し、『十八円満抄』となると、『修禪寺決』の「蓮の五重玄」の釈名のところで述べられる十八円満の法門が、そっくりそのまま引き写されている。⁽¹⁸⁾したがって、定遺がこの二書を偽書扱いされているのも納得できる。などが大雑把にいつて挙げられよう。

(三) 立正観抄の問題点

——四重興廃——

△四重興廃について▽

四重興廃とは、釈尊の一代の教えを爾前・迹門・本門・観心の四つに分けて、その勝劣興廃を論じ、教相から離脱した観心(止観)の超勝を説く点にあり、その原型は天台智顛の『法華玄義』(卷二上)⁽¹⁹⁾に見られる。但し、『玄義』にいうものは四重を包含する興廃であって、天台本覚思想という観心勝を究極とする段階的な四重興廃とは違うものである。以下問題とするのは、観心(止観)の超勝を落着とする段階的な四重興廃、そして、これをより進展させた

止観勝法華及び禅勝止観である。

四重興廢の成立期についての従前の研究は、例えば石田瑞磨先生は「口伝法門における四重興廢の成立」(『印度学仏教学研究』十五—二所収)中に、四重興廢は少なくとも鎌倉初期、十二世紀の終わりに成立していた公算が大である、との見解を示されている。その一方、田村先生は「天台本覚思想の文献」(『鎌倉新仏教思想の研究』所収)中に、四重興廢乃至止観勝法華の成立は、鎌倉中期・一二五〇年以降の静明あたりにもってくるのが妥当ではないかと力説されている。

△日蓮遺文と四重興廢▽

日蓮遺文中に四重興廢が見られるのは、真偽未決の論のある『十法界事』と『立正観抄』のみで、真蹟の現存・曾存のものにはない。すなわち、『十法界事』には、

迹門、大教起爾前、大教亡。本門、大教起迹門爾前亡。観心、大教起本迹爾前共亡。(25)

と、典型的な四重興廢が示され、『立正観抄』(定遺八四六)にもほぼ同様の記述がある。しかし、『立正観抄』は四重興廢にふれつつ、

当世天台宗、学者念仏・真言・禅宗等同意、故天台教、積習失、背法華經、得大謗、法罪也。若止観勝法華經云、者種々、過有之。(26)

と、

天台至極、法門法華本迹未分、処無念、止観立最秘の大法とすと云邪義、大僻見也云事。……(中略)……
・若止観不レ、依法華經一者天台、止観同ニ教外別伝、達磨、天魔、邪法。(27)

最蓮房あて御書の問題点(中條)

と、止観勝法華劣の評破に力が注がれているのである。⁽²⁸⁾これに対し『十法界事』は、

此⁽²⁹⁾是如来所説聖教 從淺至深次第⁽³⁰⁾迷也⁽³¹⁾

と、肯定の姿である。そして、『立正観抄』では、当時の叡山が祖師達磨禪の影響を受け、四重興廃から止観勝法華・禪勝止観にまで進展した旨を、

当世⁽³²⁾学者不⁽³³⁾得⁽³⁴⁾此意⁽³⁵⁾二故⁽³⁶⁾ 天台已証⁽³⁷⁾妙法⁽³⁸⁾智⁽³⁹⁾失⁽⁴⁰⁾止観⁽⁴¹⁾三法華⁽⁴²⁾經⁽⁴³⁾一禪宗⁽⁴⁴⁾勝⁽⁴⁵⁾二止観⁽⁴⁶⁾三思捨⁽⁴⁷⁾三法華⁽⁴⁸⁾經⁽⁴⁹⁾二付⁽⁵⁰⁾三止観⁽⁵¹⁾一捨⁽⁵²⁾三止観⁽⁵³⁾二付⁽⁵⁴⁾三禪宗⁽⁵⁵⁾一也⁽⁵⁶⁾

と、論難されていることを知るのである。⁽³²⁾

△日進と四重興廃▽

祖師日蓮の三十三回忌には既に身延の貫首たる地位にあり、出来るだけ祖師に忠実でありたいと心掛けて、日蓮門下の指導的立場にあったであろう日進は、『立正観抄』を二度に亘って書写した。⁽³⁴⁾かかる事実から推し量ると、日進は四重興廃・禪勝止観などという天台・伝教の意に反する無教偏観主義についての知識は、かなり豊富ではなかったかと察せられるのである。

日進は貞和二年(一三四六)十二月、七十六才で寂したが、その著に『玄義見聞集』⁽³⁵⁾・『三國仏法弘通次第』⁽³⁷⁾・『日蓮聖人御弘通次第』⁽³⁸⁾・『本迹事』⁽³⁹⁾・『破浄土義論法華正義』⁽⁴⁰⁾等がある。その教学はこれらの著の外、日進の門に学んだ日全の『法華問答正義抄』⁽⁴¹⁾によって窺うことができる。今、ここでは四重興廃・止観勝法華についての記述のある『本迹事』及び日全の『正義抄』について考察する。

(1) 慶長十九年(一六一四)極月八日、身延十一世寂照日乾が身延西谷善学院において筆写され、「進師之御記歎」

との奥書を残す『本迹事』を見ると、その末尾近くに、

問云観心本尊抄云、南岳天台等出現以三迹門、為レ面以三本門、為レ裏、百界千如一念三千盡三其義、云云。付レ之南岳天台、行既以三本門、為レ面可レ云也。四重興廃時本迹上立三観心、可レ云也。是則大師実義也。以三本迹、為レ裏、以三観心、為レ面可レ云也云何。⁽⁴²⁾

と、四重興廃を以て南岳・天台の所立となして、本迹の教相以上に観心をたつのが大師の実義であると、四重興廃に与同的な立場に立つ旨の記述がある。⁽⁴³⁾

(2) 武州一の江妙覚寺の祖日全⁽⁴⁴⁾（一二九四〜一三四四）は、日進について宗学を学び、台学を叡山・仙波に学んだ。

その著に『法華問答正義抄』（全二十二卷）がある。かの日向の『金網集』が諸宗の見聞を雑記するのに対し、本書は一卷から十二卷までは、法華經の要文を釈して法華正義の顯揚を目的とし、十三卷から二十一卷までは法華教学の立場から諸宗の見聞について記し、最後の二十二卷は法華天台止観勝劣及び当家の観心の行相を論じたもので、いわば今日でいう宗学概説の書に相当する。ここでは第二十二卷中の「法華与天台止観勝劣事」を問題とする。⁽⁴⁵⁾

『正義抄』によると、止観勝劣法華の説は、政海・一海及び尊海一門の唱導になるものであったらしい。その辺の経緯を日全は次のごとく記している。

然予住山之時、对三西谷禅美、委細尋三此事、禅美委細示云、此事古千手堂、豎義時無動寺、政海精レ之。止観、大師己心中所行、法門者、故不レ依三經論、覚タリ。⁽⁴⁶⁾

と、止観勝劣法華の説は、政海によって唱え出された。しかし、扶全なるものによって、

不審也。抑止観、法華勝タリト被レ精レ之、条、天台及山家大師等、釈義未レ見、随漢土天台門流中更無三此義。況本朝先

最蓮房あて御書の問題点（中條）

最蓮房あて御書の問題点（中條）

徳等代々相伝無_レ此_レ義_一。誰人_{コソ}相伝乎_{（47）}。

と、詰問されている。これに対し政海は、

千手堂法談事取_三時所_ニ浮精義也。非_ニ師資相承_一。_{（48）}

と、釈明したが、扶全によつて再び、

自_レ今已後、如_レ此_レ謗法邪義於_ニ山上_ニ学侶_一者、努々不_レ可_レ有_レ之_ニ云云。_{（49）}

と、封じ込められ、政海もこれに合点の旨の返状を寄せたという。その後、

東国尊海、随分泌法師資相承云事_ニ近來少_一。其間有_レ此_レ条_一一海為知_{ラン}。仍尋_ニ一海_一時_{（50）}。

と、仙波の尊海が止観勝法華の説を名目としたので、或人がこのことを政海の一門の一海に尋ねたところ、一海

は、

先師政海抄粗見_ニ子細_一有_ニ云_一へ共、治定_ト不_レ見。故無_レ示_レ他_ニ云云。_{（51）}

と、答えたという。

この経緯を見ても日全の当時、比叡山上でも止観勝法華の説が指弾されていた事実を知るとともに、日全はかかる説を「私曲浮言也」_{（52）}「天魔説也」_{（53）}と斥けていることを知るのである。そして、『立正観抄』は、最蓮房が止観勝法華という義について、これを報じ、批判を請うたのに対する返書である。とすると、最蓮房は政海から聞いたものだろうか。この政海という人物、恐らく土御門門跡流の政海と思われるのであるが、残念ながらその伝は詳らかではない。もし政海の伝が明らかになれば、おのずから止観勝法華の説の成立時期も浮き彫りされようというものである。なお両書とも、日進が知悉していたであろう禪勝止観についての記述はない。

△日蓮遺文と真如隨緣論▽

『立正觀抄』には、

傳教大師血脈云、夫一言妙法者、開二兩眼、見三五塵境、時者、心隨緣真如也。閉二兩眼、住三無念、時者、當三不變真如也。故、聞、此一言、二方法、茲達、一代、修多羅含、二言、一文。

と、さらに、

夫尋天台觀法者、於三蘇道場、三昧開發、已來開、目思、妙法、隨緣真如也。閉、目思、妙法、不變真如也。此兩種、如、只一言、妙法有、我唱、妙法、時、方法、茲達、一代、修多羅含、一言。

と、真如隨緣論が述べられている。遺文を通していえることであるが、遺文中より真如乃至真如隨緣論に言及されたものを拾うと、今いう『立正觀抄』・『守護國家論』・『當體義抄』・『日女御前御返事』、及び偽撰書（『成仏法華肝心口伝身造抄』・『誦誦法華用心抄』・『万法一如抄』）等である。『守護國家論』の場合は、妙樂の『弘決』の第四の三の言を引いたものであるから宗祖の言葉ではない。『當體義抄』・『立正觀抄』・『日女御前御返事』については、古来から真偽未決との論もあるから、したがって、確実な遺文には、真如に関する論は存在しないことになる。宗祖は最澄を根本大師と仰ぎ多大の法門を吸収されたことは、今更いうまでもない。その宗祖に最澄が尊重活用した真如隨緣論が見られぬということは、真に不思議であるといわざるを得ない。思うに、宗祖にとって、法華經の根本真理は一念三千であったから、かかる論は所詮別教に属する教理であって、天台法華宗の元來からの教学ではないと判断された結果、發表を差し控えられたものであろうか。

最蓮房あて御書の問題点（中條）

△金網集と真如隨緣論▽

古来から身延門流の秘書として重要視された『金網集』に、真如隨緣論を見ることが出来る。周知のように、『金網集』は日向が宗祖の講義を聴講し、また、自ら見聞するところにしたがって、諸宗破立の大綱を記し、広く経・論・釈・疏の金言を援引して、華嚴見聞・真言見聞等と名づけ、総括して『金網集』と題されたものである。⁽⁶⁷⁾この『金網集』十四卷ある中、身延山に蔵され、四世日善の筆になる「理具之事」の中に△隨緣真如不變真如事▽⁽⁶⁸⁾という一項がたてられている。紙巾が許されないので引文は掲げぬが、かなりの紙面を割いて、真如隨緣・不變についての問答往復がなされていることを知るのである。となると、『金網集』には存、遺文には不存の真如隨緣論のあり方が問題となろうが、所詮は「理具之事」中の論であって、日蓮教学の正系のものではなく、傍系に位置するものであろう。しかし、『金網集』にかかる論が存在することによって、当然のことながら宗祖は、真如隨緣論を知悉していたことは間違いない。

△日朝と真如隨緣論▽

身延山中興と仰がれる十一世行学日朝の臨終の法談に、真如隨緣論がフルに活用されていることを知るのである。すなわち、日朝の弟子の日任が、

此等法門予命今日ニヤ限ラン最後ノ觀法也トテ被レ仰訖云云。⁽⁷⁰⁾

と、注記する『日朝上人御辞世之句』中に、法談の全文が掲げられている。その法談中に、例えば、

「女旨血脈」云開ニ兩眼一見ニ五塵境、時者心ニ隨緣真如、閉ニ五根、住ニ無念、時者當ニ不變真如ニ云云。⁽⁷¹⁾（以下略）

と、記されてある。これは『立正觀抄』と同一の引文である。かかる事実から察するに、日朝は宗祖が意識的に用い

ることを避け、言明する時は細心の注意を払ったであろう真如随縁論を、公然と使用していたことを知るのである。

(四) むすび

以上極めて荒い論となつてしまつたが、ぐくくりとして拙論の要点を述べるならば、

(a) 確実な遺文には、四重興廃・止観勝法華の説は見られない。

(b) 日進の門下生であつた日全の『正義抄』によると、止観勝法華の説は、政海がはじめて唱えだしたという。これにしたがうと、宗祖及び静明と尊海との間に恐らく位置するであろう政海という人物が、『立正観抄』を云々する時、大きな係わりをもつてくるようである。

(c) 『金網集』は存、遺文は不存の真如随縁論であるが、所詮は「理具之事」中のものであつて正系の教学ではなく、傍系に位置するものであらう。

(d) 日朝の頃になると、傍系に属する真如随縁論が公然と活用されていることが確認されるのである。の四点を挙げる事ができよう。

(1) 一八二～三三五

(2) 浅井円道氏「宗祖と慈覚・智証——要麟先生への疑義」(一九二『大崎学報』一二二)を参照されたい。

(3) 九一～一〇七、及び拙稿(二二二～二二五『印度学仏教学研究』二九一)参照

(4) 田村芳朗氏『鎌倉新仏教思想の研究』(四〇三～四七四)、日本思想大系九『天台本覚論』(五二一～五四一)を参照されたい。

最蓮房あて御書の問題点(中條)

最蓮房あて御書の問題点（中條）

- (5) 浅井円道氏「宗祖における観念論打破の思想」（一四四『日蓮教学の諸問題』）参照
- (6) 定遺八四七
- (7) ♪ 八四九
- (8) ♪ 八四九、但し『灌頂玄旨血脉』と同じものようである。
- (9) ♪ 八四九
- (10) ♪ 五二二
- (11) 伝全五―五九
- (12) ♪ 五―三六〇。「生死覚用鈔」は円仁の作と伝える独立した一本もあるという。なおかかる件については、田村芳朗氏「鎌倉新仏教と日蓮思想」（二六六の注（14）『日蓮聖人研究』）を参照されたい。また、『大白牛車書』（定遺一四一二）中においても同一の引文が見られる。
- (13) 五四〇～五四一を参照されたい。
- (14) 浅井円道氏「日蓮聖人の日本天台史観について」（二五九『日蓮聖人研究』）によると、宗祖はこれらの書を読了されていない。
- (15) 前掲『天台本覚論』（五六二）参照
- (16) 注（13）参照
- (17) 定遺二二三七
- (18) 定遺二二三八～二二四〇までのところが、伝全五―一三〇～一三四の部分と全同である。なお『臨終一心三観』（定遺二二〇五～二二〇六）には、『修禪寺決』の一心三観の行門の口伝のところで述べられる臨終の一心三観が、そっくりそのまま引用されている。
- (19) 大正蔵経三三―六九七（中）
- (20) 前掲『天台本覚論』（五三六）は「四重相互興廢」と形容されている。
- (21) 三〇一
- (22) 四二八
- (23) 俊範の弟子の静明である。叡山で宗祖と同学の士といわれている。

(24) 浅井要麟氏前掲著(二五五〜二五七)を参照されたい。

(25) 定遺一四〇

(26) 〃 八四六

(27) 〃 八四九

(28) 『立正観抄送状』には「止観勝法華^{ハク}申邪義」(定遺八七一〜八七二)とある。

(29) 定遺一四〇

(30) 〃 八五一

(31) 宗祖が折伏を加えたのは祖師禪である。日本思想大系九『日蓮』(五三七〜五四四)を参照されたい。なお『立正観抄』には「天魔之語」(定遺八五一)とか「天魔所為」(定遺八五一)とある。

(32) 定遺は『立正観抄』を日蓮赦免の文永十一年に係け、身延の筆であるという。最蓮房あて御書全般についていえることであるが、最蓮房は比叡山の学僧であったためか、当時の天台教学について様々な質問を発し、それに対して宗祖は相手の理解を得やすい様な文辭を以て回答を与えたため、最蓮房あての御書はそのタイトルを見ただけでも中古天台色が濃いことは周知の通りである。宗祖より先に何らかの原因で佐渡配流となっていた最蓮房の赦免は、『日蓮宗年表』(一四)によると、宗祖赦免の翌文永十二年(四月改元・建治)である。『立正観抄』は止観勝法華劣という義について、これを報じ、批判を請うたのに対する返書である。とすると、その教示を仰いだ書簡の作成の地は佐渡ということになる。果して一介の流僧の最蓮房が、当時の叡山教学に持て囃されたという四重興廃乃至止観勝法華・禪勝止観という義について、知悉していたものであろうか。四重興廃はともかくとして、止観勝法華・禪勝止観までは如何であらうか。それとも、既に教界にはかかる思想が風靡していたものであろうか。加えて、宗祖と同学の静明は、既に四重興廃を唱えていたという説もある。もし宗祖がそれを学んだとすれば、『十法界事』に四重興廃があっても可笑しくはない。中には『祖書綱要刪略』(一九三)『日蓮宗全書』のように、系年を佐後に係けるべきとの説もあるが、『十法界事』は四重興廃を破しておらず、仮にこれを真撰とするならば、宗祖初期の天台与同時代のものであると見ることが出来る。しかし、四重興廃を最蓮房經由の知識であるとする、『十法界事』は如何様に扱われるべきであらうか。

(33) 日蓮は正和二年(一一三三)に身延入山(『日蓮宗年表』二七)、そして、翌三年は祖師日蓮の三十三回忌に相当する。なお中山三世日祐は、宗祖三十三回忌を期して、身延参詣を志している。

最蓮房あて御書の問題点(中條)

最遊房あて御書の問題点(中條)

- (34) 定遺八五一の脚注参照
- (35) 『日蓮宗事典』(一三二五)
- (36) 身延山久遠寺藏
- (37) 『三國仏法盛衰事』(宗全一―三三三―三三三〇)・『支那仏法弘通次第之事』(宗全一―三三〇―三三五)・『日本仏法弘通次第之事』(宗全一―三三五―三三九)の三篇を合せていう。
- (38) 宗全一―三三九―三四〇
- (39) 立正大学図書館藏
- (40) 宗全一―三四一―三三三
- (41) 立正大学図書館藏(写本)。なお宮崎英修氏『不受不施派の源流と展開』(八一)の注(29)を参照されたい。
- (42) 一三紙左
- (43) 浅井要麟氏前掲著(二四一―二六七)を参照されたい。
- (44) 宮崎英修氏前掲著(四一―四二)中に日全の略歴が述べられている。
- (45) 林宜正氏「止観勝法華思想と仙波教学」(二四二―二四四『清水竜山先生古稀記念論文集』)と、注(43)を参照されたい。
- (46) 一紙左
- (47) 二紙右
- (48) 〃
- (49) 二紙左
- (50) 〃
- (51) 〃
- (52) 七紙左
- (53) 八紙右
- (54) 前掲『天台本覚論』(五九四)の「相承略系譜」参照
- (55) 定遺八四九
- (56) 〃 八五〇―八五一

(57) 定遺八四九にいう真如隨緣論は、いわば最澄の口を借りての真如隨緣論であるが、定遺八五〇～八五一にいうものは、明らかに宗祖の考への表明である。

(58) 定遺一二四

(59) ♪ 七五七。なお拙稿「最蓮房あての御書の検討―当体義抄について―」（『布教資料十一集』五四～五九・静岡県連合布教師会編）を参照されたい。

(60) ♪ 一三七六

(61) ♪ 二一〇六

(62) ♪ 二一七九

(63) ♪ 二一八七・二一八八・二一九〇

(64) 大正藏經四六一二六八（上）

(65) 最澄は真如隨緣論を駆使して法相教学に対抗し、天台教学の正当性を論証した。なお真如觀尊重の気風は、論争書ばかりではなく、例えば『註無量義經』などの論争書外のものにも認められる。

(66) 浅井円道氏『上古日本天台本門思想史』（二七二～二七九）を参照されたい。

(67) 宗全二三一例言（一）参照

(68) ♪ 一四一五九四

(69) 日朝はこの年（明応二年四月二十八日）から七年延命している。

(70) 本尊論資料（一三九）

(71) ♪ （一三八）

なお『昭和定本日蓮聖人遺文』は定遺、『日蓮宗々学全書』は宗全、『大正新脩大藏經』は大正藏經、『伝教大師全集』は伝全、とそれぞれ略称した。

最蓮房あて御書の問題点（中條）